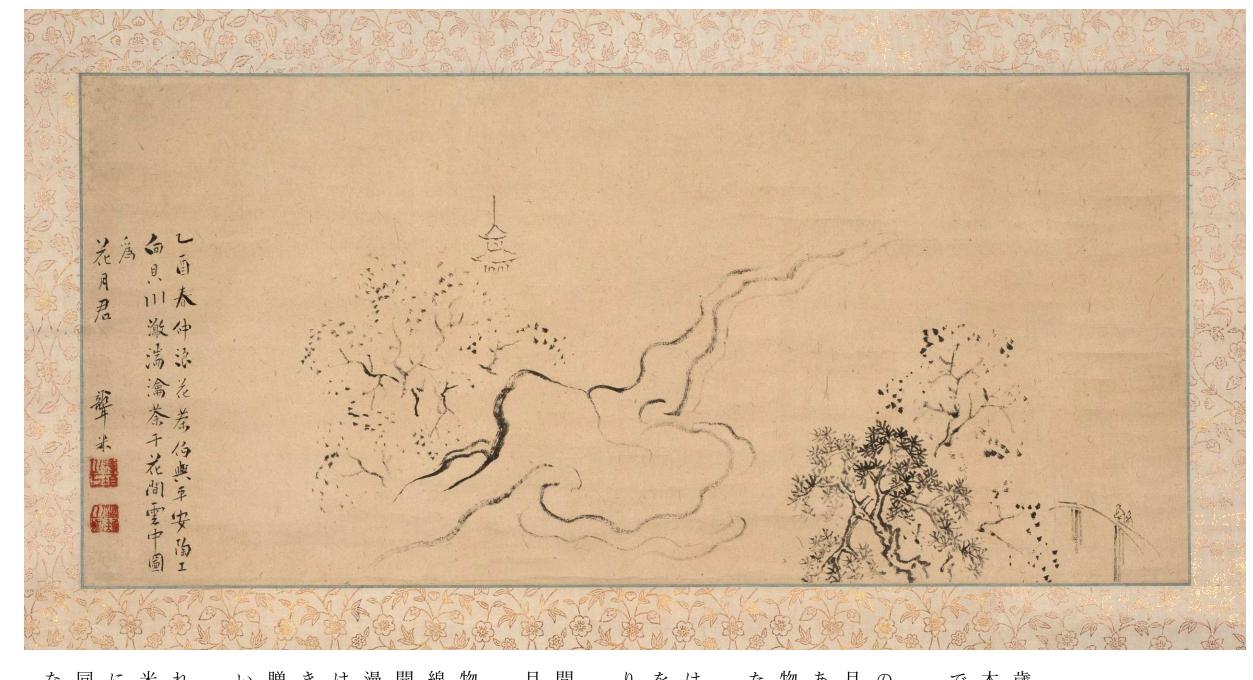
嵐山行楽図 木米 紙本墨画 縦三〇·七 横六六·八 文政八年 (一八二五)

個人蔵





贈るには十分な内容であったに違いな 開の桜が咲き誇り、雲が沸き立つ」春爛 き生きとした思い出を共有した友人へ 漫の嵐山の景と推測される。どこかとぼ 線の先に悠然と広がるのはまさしく「満 物は花月菴鶴翁と木米であり、彼らの視 間雲中」で煎茶を楽しんだ思い出を、花 を意味するものと推測されている。つま は詳細不明だが、 た田中鶴翁(一七八二~一八四八)を、 物であり、大坂で煎茶花月菴流を創始し 月君の為に図す。聾米」(原文は漢文)と 木、そして橋を渡る二人の人物が墨一色 歳の作で、渦まくような流雲、仏塔、 けた味わいのある簡略な風景図だが、生 月菴鶴翁の為に描いたことが判明する。 り文政八年二月、花月菴鶴翁とともに ある。「浪花茶伯」と「花月君」は同一人 の激湍に向い、 で描かれている。 「貝川」の激しい流れを望みながら「花 「平安陶工」は木米自身を示す。「貝川」 「乙酉春仲、浪花茶伯と平安陶工、貝川 この款記を踏まえると、橋上の点景人 文政八年(一八二五)二月、 花間雲中に茶を瀹る。花 京都の桂川かその支流 画面左側の款記には 木米五十

米」重郭楕円印を捺した陶製の軸が左右 れた時期は不明であるが、本作には「木 同時に鑑賞する楽しみのある作品とも に用いられており、木米の絵、書、 なっている。 なお、 現在のような掛軸装に仕立てら

(サントリー美術館 久保)

款記:乙酉春仲浪花茶伯與平安陶工人 向貝川激湍瀹茶于花間雲中圖 ノ為ノ花月君 /聾米